

日吉台地下壕保存の会会報

第65号

日吉台地下壕保存の会

年頭にあたって

日吉台地下壕保存の会 会長 大西 章

保存から活用へ

日吉台地下壕保存の会会員の皆様、あけましておめでとうございます。本年もよろしく申し上げます。

新年を迎え、日本は不況の中であり、リストラや賃下げなど暗い話題が多くあり、また世界ではイラクの大量破壊兵器開発問題、北朝鮮の核施設凍結解除問題などアメリカの帝国主義化が突き進んでいます。軍事力をバックにした異文化の封じ込めは何も解決しないこと歴史から学んでいるはずだと思います。しかし、歴史は繰り返しているようです。

これを打ち破るのは個人が世界を見通す能力を養う教育力しかないと感じています。個人が自分で考え、しっかりとした価値観を持つことがまず一歩だと思います。この地下壕をモノとして保存するだけではなく、若者が考える場を提供するようにいろいろなことに活用していく必要があります。昨年来小・中・高校生を案内し、みんなが議論する環境を提供してきました。地下壕がたんにモノだけではなく、価値観を持った語りかけるモノにしていきたいと思っています。今年は更いろいろな文化的なこと、例えば音楽などと融合して若者に積極的に働きかけなどが出来れば良いと思っています。

また、昨年は慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎ギャラリーで10月10日から14日まで「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」というテーマで「第10回平和のための戦争展」を開きました。当時の青春群像の写真、慶應関係者戦没者の遺品、また日吉台地下壕、蟹ヶ谷通信隊地下壕、登戸研究所の写真など300点を超える展示が出来ました。またプレイベントとして「戦争遺跡を歩く・みる・ふれる」を企画し、また、昨年からの埋め戻しが始まった箕輪艦政本部地下壕を共同で学術調査をしました。少しずつではありますが我々も勉強して、今何が大切かを、また何をやらなければいけないかを地下壕という空間を基に考えていきたいと思っています。本年も運動の拡がりや質的な向上を目指して頑張りたいと思います。よろしく申し上げます。



第10回横浜・川崎

平和のための戦争展

～日吉キャンパスにみる戦時下の青春～

今年で10回目を迎えた「横浜・川崎平和のための戦争展」は、2002年10月10日から14日まで、慶應義塾大学日吉キャンパスの「来往舎」と名付けられた真新しい建物で開かれた。銀杏並木に面したガラス張りの巨大な研究棟で、広いギャラリーもあり、展示と講演をゆったりと別々に行うことが出来た。日吉キャンパスが会場となるのは、一昨年の第8回戦争展に次いで二度目である。「平成14年度学術フロンティア 超表象デジタル研究センター～空間と人間～」との共催であった。そこで展示の内容も日吉キャンパスの写真を中心にし、テーマを「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」とした。



◎プレイベント ピースロード多摩丘陵を歩く

昨年夏出版した『戦争を歩く・みる・ふれる』（教育資料出版会）は、多摩丘陵に残る戦争遺跡のやさしい研究書であると同時に、戦争遺跡を歩きながら、平和について考えるためのガイドブックでもある。今年10回目を迎えた横浜・川崎平和のための戦争展のプレイベントとして、この本に従って5つのコースを歩いた。6月から10月までの月に1度の散策は、梅雨空から晩秋まで、厳しいけれども趣もあり、大変好評であった。

○Aコース 井田・蟹ヶ谷を歩く 6月23日(日) 参加約50名

(30名は蟹ヶ谷三田会会員)

日吉～真福寺～ひとみ座～東神庭遺跡～海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊跡（ここは戦後日吉キャンパスが米軍に接収されたため、短期間慶応義塾獣医畜産専門学校が使用していた）

○Bコース 宮崎台を歩く 7月21日(日) 参加約20名

武蔵溝の口駅～ねもじり坂～戦災地蔵～宮崎中学校（東部第62部隊本部跡）～川崎市青少年の家（おぼけ灯籠）～馬絹古墳～宮崎1丁目（陸軍境界標）戦災地蔵に父親の名前が刻まれている人や、第62部隊の将校だった人の話を聞く。

○Cコース 日吉台を歩く 8月18日(日) 参加約80名

日吉駅～慶応義塾陸上競技場～第一校舎（海軍軍令部第三部跡）～教会堂～弥生式堅穴住居跡～海軍連合艦隊司令部跡（寄宿舍）～地下壕

○Dコース 箕輪を歩く 9月29日(日) 参加約20名

日吉駅～諏訪神社～大聖院(戦災樹木・竹橋事件小嶋萬助の墓)～箕輪洞谷横穴墓群～海軍艦政本部地下壕～井上正夫の碑～日吉台小学校(海軍人事局功績調査部跡)

- Eコース 登戸研究所を歩く 10月20日(日) 参加約20名
生田駅～明治大学生田校舎(陸軍登戸研究所跡:次のものが現存している;動物慰霊碑、消火栓(陸軍の印あり)、3科倉庫、2科化学研究室、2科枯れ葉剤研究室、弾薬庫、弥心神社)

◎開催プログラム

〈展示〉 ギャラリー

10月10日～10月14日

- 日吉校舎建設から、太平洋戦争終結までの日吉キャンパスの変遷を、写真を中心にみる。戦時色が濃くなるにつれ、学生の服装や表情が変化するのが見て取れる。
- 四人の戦没塾生(上原良司、宅島徳光、塚本太郎、原亮)に関する展示
- 日吉台地下壕、蟹ヶ谷通進隊地下壕、登戸研究所のパネル
- 写真家安島太佳由氏の「日本戦跡」写真展



〈講演〉 イベントテラス

10月13日13:30～16:00

「特攻隊とは何だったのか」

岩井忠熊立命館大学名誉教授(日本近代史)



2002年夏、兄忠正氏と自分の体験を下に『特攻』を出版、戦争と平和について熱く語る。

〈若者の発表〉 10月14日13:30～16:00

「体験を受け継ぎ、平和をつくる」

1. 岡上そう(日吉台地下壕保存の会運営委員)
2. 佐藤宏樹(戦争展実行委員 高校教師)
3. 藤田大介(慶応大学学生、日吉台地下壕ビデオ制作)

それぞれの真摯な意見発表に、聴衆から賞賛の声が多く寄せられた。

〈フィールドワーク〉 10月13・14日10:00~12:00

日吉台地下壕の見学を実施する。2日間で約80人の参加があり、体験と知識の両方を同時に得ることの大切さを確認した。

○若者の発表・発表者より

1. 『戦跡保存に関わって』

岡上そう

戦争展の目玉の一つとして「若者の発表」がある。今回自分が発表したのは、「有事法制と日吉台地下壕、国家総動員法」というテーマだ。今最もタイムリーなテーマだと自負している。しかし、我々のような戦争遺跡保存団体に限って、この「有事」の問題に対し、あまり積極性が見られないと感じた。恐らく、自分たちの活動と「それ」とは「別物」みたいに考えているのだろう。自分は「平和のために地下壕を保存する」という保存の会の方針があるのだから、有事の問題を地下壕の過去の歴史も含め、もっとクローズアップできるはずだ！と思い、現在の有事法と過去の国家総動員法との間に共通点を見つけ（岡上、富沢、喜田）の3人を核とする聞き取り調査などの調査活動を行った。その結果を数枚の資料にまとめ発表した。そうすることによって新聞やデモ集会だけでは分からない部分を「一般の人達」に多く知ってもらうことが出来ると思ったからだ。



だから内容的にシンプルで、こういう世界に興味のない人が読んででも分かる程度のものにしたつもりだ。要は発表の場でどれだけ多くの人に伝えたいことを伝えるかが目的なのだと思う。小難しい専門用語など並べてもうんざりしてしまうだけだし、それに自分たちは専門家じゃない。聞き手と同じなのだ。そしてゆくゆくは言葉で伝える発表もいいが、自分としては「戦争の発信地だった地下壕という場所で未来へとつなぐ平和へのメッセージの発信地」として、「音楽」や「美術」などで表現、アピールしていきたいと思っている。

2. 『戦争展と学びの重要性』

佐藤宏樹

平和のための戦争展の開催も10回目を迎えた。この10年で平和をめぐる国際社会のありかたも大きく変わり、去年は「同時多発テロ」というこれまで私たちが体験した事のない様な出来事が起こった。この「テロ」は敵の見えない戦争と言われ、見えない敵に勝つためには断固たる態度をとらねばならぬとして、対決の表明手段として武力が容認されようとしている。日本においてもこのような論調と動きがとられようとしているが、果たしてテロ防止に軍事的な封じ込めは本当に有効なのであろうか。

私の勤務している学校では高校生に同時多発テロについての意識調査を行ったところ、テロ防止に有効な手段として「軍事的な封じ込め」を選択した子どもは10%強に過ぎず、最も多かった回答は「対話を通じた異文化理解」であった。また学年が進むに従って「世界の貧富の差をなくす」という回答が増加した。また同時多発テロ事件に対して日本がどう対応すべきかというとの回答において「平和的呼びかけ」を選んだ生徒も学年が進むに従って増加している。

この認識の変化は何か。私は「学ぶ」ということの成果ではないかと考えている。ここ数年教育現場においても右傾化の動きが見られるが、今私たちに求められている教育とは、これまでの戦争を学び、これからの平和な社会を展望することのできるものであろう。戦争の

悲劇はいつも民衆が背負い、その解決のために武力を用いることは新たな戦争を生み出すことを今こそ学ばなければならない。その「学び」とは子どもたちとともに考えるものでなければならないし、私たちの身近な問題から切り込むべきであろう。そう考えると私たちがこれまで10年かけて取り組んできた戦争展の重要性がますます高まると考える。「私の街から戦争が見える」とはすなわち、「平和」を考えることであり、「学ぶ」ことである。「平和」を学び続けることが「平和」を創り出すために必要ではないだろうか。

3. 『若者としての意識改革』

慶応義塾大学理工学部3年 藤田大介



この度、10月に慶応キャンパス内で行われた『平和のための戦争展』内において『わが足の下～日吉台地下壕潜入』というビデオを上演させていただき誠にありがとうございました。ご来場の皆様からのコメント用紙を一枚一枚丁寧に読ませてもらいまして、その中の言葉一句一句からこれまで以上に”若者が”平和に向けての意識の向上を図らねばならないと純粋に感じさせられました。

先日大学メディアセンターの方から嬉しいニュースを聞きました。

「地下壕のことを調べようと思って・・・」という大学2年生の女の子がやってきたそうなのです。早速その方は自分の映画を資料として紹介してくださったのですが、後日感動したその女の子が再び図書館にやってきて、「ぜひまわりにも薦めて、もし続けられるようなことがあるのだったらぜひ一緒に・・・」との言い付けを僕に残してくれたそうです。始めは何気なく放送研究会内で始めたこのプロジェクトでしたが、少しずつ外に向けてメッセージが伝えられていることに、今表現しがたい喜びを噛み締めています。

僕は大学生の傍ら、現在Tokyo FMとBay FMでマイクを握らせてもらっています。～戦争反対、平和への願い～それは日々マイクの前で紹介する音楽の中にもアーティストが様々な形で多く訴えています。ジョン・レノン没後21年目が先日過ぎたばかりですが、彼は生前こんな事を言っていました。「世界にどうして国境があるのだろうか？隣の国に行くだけなのに・・・パスポートに証明書、写真にビザ・・・全部そろえないと身動きすら取れない。国境がまだなかった大昔の事を考えてごらんよ。世界はもっともっと狭かったはずだぜ。」

僕ら若者はまずフィランソロピー（博愛・思いやり）を原点とする”人間らしさの復興”を心に留めることでかけがえのない地域社会を救うことになると思います。人々が不当に生命を失うことなく幸福に暮らしていけるゆける社会づくりの為に、次の時代を担い生まれてくる子どもたちにも心の栄養分を十分にあげられるような人間としての〈大人〉にならなくてはと感じました。

5日間で少なくとも300人～400人の来場者があったと思われる。事前の大学内での宣伝不足や当日の案内板の分かりにくさなど反省点はいくつか残ったが、10回目という節目の年の画期的な戦争展であった。（運営委員）

箕輪艦政本部地下壕学術調査実施される。

2002年11月20日～25日まで6日間にわたって慶應義塾大学桜井研究室（桜井準也助教授：考古学）による日吉台地下壕の学術調査が行われました。日吉台地下壕の学術的な調査は本格的なものは戦後初めてです。調査の主要な部分は桜井先生を中心とする大学院生、大学生が行いましたが、日吉台地下壕保存の会では運営委員を中心にこの調査に全面的に協力し、多くの学術的な成果を得ることが出来ました。

今回の調査は防災課の管轄部分为中心でしたので今後公園課の管轄部分についても調査・研究は継続され、学会などの研究誌にまとめられるということです。

日吉台地下壕は国の指定史跡候補にも挙げられ、調査は本来行政が行うべきものですが、民間レベルで学術的な調査・研究が行われるのは、戦争遺跡に関しては全国的にも数少ない画期的なものとなりました。（運営委員）

箕輪地下壕（海軍省艦政本部地下壕）の調査成果

慶應義塾大学文学部 桜井準也

1. はじめに

日吉台に残された地下壕は、太平洋戦争中に海軍が地下に建設した施設である。このうち、慶應義塾大学日吉校舎側の連合艦隊司令部地下壕はレイテ作戦や沖縄戦などの作戦を発令したことで全国的に著名な戦争遺跡である。これに対し、調査を実施した箕輪地下壕（海軍省艦政本部地下壕）は、昭和20年8月14日に一応完成したものの、素掘りの部分が多く、敗戦間際のセメント不足のため田園調布から運び込んだ大谷石を利用する



大谷石利用の壕（A列）

など当時の物資不足の状況を物語る貴重な地下壕である。2002年11月20日～25日の日程で実施した今回の調査は、箕輪地下壕のうち北側の部分が災害防止対策の一環として埋め戻しが進行していることから、埋め戻しが完了する前に学術調査を実施する必要性から緊急に行った調査である。調査にあたっては、慶應義塾大学の大学院生や学生、日吉台地下壕保存の会の方々に協力をお願いした。私自身、湘南で地下壕（戦術用地下壕）の調査を行った経験は若干あるものの、日吉台の地下壕の調査ははじめてであったため不慣れなことも多かったが、関係者の協力が無事調査を終了することができた。

2. 調査内容

今回の調査内容は ①測量調査、②記録写真撮影、③地下露頭地質調査、④遺物の採集

である。ただし、今回の調査は緊急性の高い北側部分（A列～E列）を中心に行った。このうち、測量調査については、地下壕内部の全体測量と細部測量を行った。全体測量は新たな測量は行わず、既成の測量図を用いて内部構造や構造物を書き込む方法を取り、細部測量は特徴的な構造物を実測することとした。地下露頭の地質調査については関東第四紀研究会の方々に実見していただきコメントを頂いた。また、調査にあたっては光源は懐中電灯のみで発電機等は使用せず、ヘルメット着用や酸素測定器の携帯など安全管理に努めた。

3. 調査成果

(1) 測量調査の成果

調査の結果、地下壕にはほぼ完成されている部分と未完成の部分が存在することが判明した。具体的にはB列からE列にかけてがほぼ完成している部分で天井・側壁・床がすべてコンクリートで施工されている。その他の部分は、①天井・側壁がコンクリートで床は素掘り（E列）、②天井がコンクリートで側壁に大谷石が用いられ、床は素掘り（A・B列）、③すべてが素掘りの状態（A3-B5間）に区分できる（第1図）。これらの状況は敗戦直前のセメン

ト不足を物語っているが、以前から注目されていた大谷石の利用については、壁全面に存在するのではなくコンクリート天井を支える柱としての機能を果していることがわかった。付属施設としては、まず通気孔が13カ所確認されたが、鉄管のみのもの、木枠の中に鉄管が通っているもの、排水を考慮した蓋のついた鉄管が使用されているものがある。天井には配電用の木煉瓦が埋め込まれており、磚子が残っている地点が1カ所存在した。排水施設については、地中に土管を埋めた後にコンクリート製の集水桝が各所に設置されているが、歪んだ形のもの、設置途上で放棄されたもの、掘削段階のものがある。また、C5地点に井戸（陶器の井戸枠）が1カ所存在する。なお、それらの配置をみると、通気孔や集水桝の数や位置が必ずしも規則的ではない点は興味深い。



通気孔（B7-C7）

この他に注目される成果として、A2付近で薦に入ったセメントが見つかったことやA3-B5間で転用された大谷石が確認されたことがあげられる。田園調布の住宅街から持ち込まれたものであろうか。なお、調査最

終日に採集した大谷石、コンクリート片、コンクリートに使用された礫、型枠材や木レンガを今後科学分析し、礫の採集地や木材の樹種を特定してゆく予定である。

(2) 地質所見

地下露頭の地質については関東第四紀研究会の菊地隆男氏(立正大学)よりコメントを頂いた。それによると、この地層は上総層群王禅寺層にあたり、全体として泥勝の砂岩・泥岩の互層になっており、地層の走行がNNE-SSW~NE-SWでNW方向に3~5°傾いている。北側のB列~C列間で壁面下部に厚いごましお状の結晶質火山灰が発見されている。この火山灰は宮田タフ(MT)という火山灰層で石英や長石などの無色鉱物、有色鉱物として多量の角閃石を含み、上部層準に軽石粒を伴う。なお、南側のI列やJ列付近では砂岩層が異常に厚く堆積していたり、層理面が起伏を伴って明らかなスランピング(海底地すべり堆積物の構造)を見せているところがある。これらの火山灰層の年代は、概略で120万年前頃ということである。



転用された大谷石(A3-B5)



地質調査

4. おわりに

今回は短期間の調査ではあったが箕輪海軍地下壕の記録を残すことができ、いくつかの貴重な情報も得ることができた。例えば、地下壕にはほぼ完成した部分と未完成の部分があり当時の地下壕の構築過程を追うことができることが確認されたこと、通気・排水施設の数や位置に規則性がないことが判明したこと、セメント不足のために側壁に使用した大谷石の使用実態が把握できたこと、地下壕の地質学的所見が得られたことなどがあげられる。なお、来年度は引き続いて本地下壕の南側(F列~J列)を中心とした測量調査を実施する予定である。

本調査は慶應義塾大学超表象デジタル研究センターの共同研究「空間と人間：キャンパス・スフィアにおける適応・生態・表象・デザインの分析と展開」(代表 高山博 慶應義塾大学文学部教授)の一部として実施したものである。調査にあたっては、日吉台地下壕保存の会、関東第四紀研究会、ともだち書店、横浜市総務局危機管理対策室、横浜市緑政局北部公園緑地事務所にお世話になりました。記して感謝致します。

参加した保存の会運営委員の感想

本番の調査に備え、運営委員有志約10名は10月27日（日）慶応大学三田キャンパスの桜井研究室で測量法の講義と実習を行いました。

測量第一日目：11月20日（水）9時30分「ともだち書店」に集合、長靴はじめ懐中電灯・軍手など装備万端整えて、6名で暗黒と沈黙の壕に入りました。中の空気濃度（流通）は予想以上にあったようです。資料を持たない（日吉の）我々は手元を照らす照明係程度しかできませんでしたが、それでも周辺の断面・形状・壁面の材質・凹凸各部の寸法採りなどは少しはお役に立てたかも知れません。足下の冷えには閉口しました。

（運営委員 常盤）

会員寄稿

「伊勢神宮と天皇制」

関崎益男

2002年7月31日から8月3日まで、三重県伊勢市・鳥羽市を訪れた。初日は、地元の人案内で伊勢神宮の内宮（伊勢市宇治館町）を散策した。近代天皇制によって作られた景観、明治大正期の宮域拡大、唯一正宮（しょうぐう）と同じ神明造りの御稲御倉（みしめのみくら）橋欄干「ねぎ型カナモノ」に残る中世の銘文などを見学。おかげ横町で買い物をした。1993年おかげ横町がオープン。場所は宇治橋の外の内宮門前。それ以前は正月以外さびれた道筋だったという。十年前と比較すると、県内でも有数のリピーターの多い観光地になった。伊勢市の純和風建築に対する低利融資は条例のおかげ。

写真は、を右側から撮ったものだ。もともとは風神社だったが、元寇がきっかけで別宮に昇格。社殿の前のあく舎に注目。これは社殿に参拝するときの日よけ雨よけだ。

風日祈宮に行くには、宇治橋・神苑（19世紀ドイツ風庭園）・火除橋（ここから神域）・手水舎（てみずしゃ）・滝祭神（たきまつりかみ）などを通る。

ところで7月中旬『いま特攻隊の死を考える』（岩波ブックレットNo. 572）を読んだ。また映画「ほたる」もテレビで放送された。明治政府は幕府に代わる権威として天皇を利用しようとした。しかし畿内を除いて、天皇という存在を（民衆は）ほとんど知らなかったという。そこで同政府は全国的に知られていた伊勢神宮（皇太神宮）を利用して、天皇のPRをする。伊勢神宮は図らずも「神社の総本山」にされたのだ。明治憲法下、統帥権を持つ天皇の裁可を得ていない”統率の外道”として、沖縄の海に消えていった特攻隊員と農業神から皇祖神・軍神に変えられていった伊勢神宮。この夏私はこの両者の矛盾をいだきつつ暑い日々を過ごした。

（高校・塾講師、川崎市中原区）



風日祈宮（かぜひのみのみや）

○活動の記録 2002年9月～12月

- 9/17 第4回運営委員会 会報64号発送 (慶応高校物理教室)
- 9/22 定期見学会 19名
- 9/24 地下壕見学会 67名
- 9/29 平和のための戦争展プレイベントDコース (箕輪を歩く)
- 10/3 地下壕見学会 旭高校 9名
- 10/10～14 第10回横浜川崎平和のための戦争展
(慶応義塾大学日吉キャンパス来往舎)
展示 「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」
講演 シンポジウム フィールドワーク
- 10/20 平和のための戦争展アフターイベントEコース (生田を歩く)
- 10/27 測量勉強会 慶応大学三田キャンパス (地下壕学術調査の準備)
- 11/2 地下壕見学会 横須賀親子劇場 24名
- 11/8 第5回運営委員会 (慶応高校物理教室)
- 11/16 地下壕見学会 出版労連 横浜シテイーガイド協会 47名
地下壕証明の電池交換 案内プレート取り付け作業
- 11/20～25 箕輪海軍艦政本部学術調査 (測量・写真撮影・地下露頭調査・
遺物・コンクリート、木材の採集)
慶応大学助教授桜井準也氏、慶応大学学生・大学院生、立正大学等
地質学研究者、地下壕保存の会会員
- 11/30 定期見学会 70名 (午前、午後 日吉郷土史会等)
- 12/3 地下壕見学会 大曾根小学校6年生 80名
- 12/4 日吉台小学校 6年生 119名
- 12/8 定期見学会 29名 海軍14期の会他
- 12/16 地下壕見学会 駒林小学校6年生 75名
- 12/17 第6回運営委員会 (日吉地区センター) 冊子作成
- 12/20 地下壕見学会 生田高校 13名
- 12/23 戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員会
- 12/25～27 沖縄歴史ツアー (読谷・南部戦跡・海軍司令部壕他) 保存の会他 9名

○予定

2003年

- 1/16 第7回運営委員会 (慶応高校物理教室) 会報65号発送
- 1/26、2/23、3/23 地下壕定期見学会

会計のお問い合わせ：白鶴邦子 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090

その他のお問い合わせ：喜田美登里 港北区下田町2-1-3 045-562-0443

ホームページアドレス：<http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

編集 日吉台地下壕保存の会

運営委員会

